

外国人のみた日本 -- 私の忘れ得ぬ日本での冒険 (カルチャー・ショック)

著者	Vella Atienza
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	166
発行年	2009-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004726

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Vella Atienza
出身地：フィリピン
日本滞在：2005年1月～

私の忘れ得ぬ日本での冒険

ヴェラ・アティエンザ

私の冒険は二〇〇五年一月四日に日本に
来た最初の日から始まった。それは私に
とって最初の海外旅行であった。また奇し
くも私の誕生日でもあった。フィリピンで
も一人で旅行したり生活した経験がなかつ
たので私は不安にかられていた。それに日
本は英語が通じない国だということでも余計
緊張していたのだ。誕生日なのに一人寂し
く何が起るか分からないでいる今の自分
が最初は悲しく思えた。

でも、気分を切り替え、これからはその
日その日を楽しみ、何が起っても新たに
物事を学んだり探求するための冒険、挑戦
だと自分に言い聞かせた。最初に驚いたこ
とは日本とフィリピンとの言葉の使い方
の違いだった。それと生活費が非常に高く
つくということである。私の先輩が成田空
港に迎えに来てくれたのだが、彼女はリム
ジンバスに乗っていいこう、というのだ。フィ
リピンでリムジンは大金持ちだけが乗る高
価な乗用車を指す。それがバスになるとど
のようになるのか想像しただけでも興奮し
てしまった。きっと日本は発展を遂げた国
だからリムジンに乗るのは当たり前なこと
なのだろうと思っただけだ。ハイクラス・
タイプの立派なバスと思っただけのもの
は驚いたことに何の変哲もない普通のバス
だった。

学校の寮についてから私がこれから住む

部屋を見たときもショックだった。これか
ら払わなければならぬ毎月の家賃の高さ
に比べ部屋はとても狭く質素な外見なのだ。
先輩は、自分はこれからマンションに引つ
越すつもりだという。フィリピンではマン
ションは値段も高額な広大な邸宅を意味す
るのでまたびつくりした。自分のこの小さ
な部屋がこれほどの家賃なら、先輩はいつ
たいいくら毎月払うのかしらと思った。し
かし、彼女のマンションを見て、それはそも
そも一戸建てなどではなく単なる、広いこ
とは広いが外見は寮の部屋とさして変わら
ない一部屋にすぎないことを知り驚いた。

日本語を話せず読むこともできない私が
毎日どうやって暮らしていくかということ
は私にとって冒険だ。食品店で買い物をする
ときラベルは日本語なので外見でそれが
何かを判断することになる。あるとき目玉
焼きをつくらうとして卵を割ってフライパ
ンに落としたり瞬間に黒い煙になってしま
ったのでたまげてしまった。料理は決し
て上手ではないが目玉焼きの作り方ぐらい
は知っているつもりだった。味見したら
甘いのだ。後になってサラダ油だとおもっ
て使ったものがみりんだったことを知った。
ほとんど見分けがつかなかったのだ。

日本人の振る舞いは、いつも丁寧でお詫
びする理由がないのによく「ごめんなさい」
というし、何かを食べるといつも「おいし

い」という。友達とこのことが話題になっ
たことがあった。アジアの国々の料理はた
くさん香辛料やスパイスを使うのでそれと
くらべると日本料理にはパンチがない。で
も日本料理は我々の料理ほど味付けが濃く
ないので健康的なのはわかる。日本人のい
る前で日本料理は淡泊だなどというのは大
変失礼にあたるので内々で変わるような合
い言葉をつくった。パーティーなどと呼ば
れたとき「おいしい」といえばそれは本当
においしいこと、もし「ヘルシー」とい
えばおいしくない（しかし健康的）というこ
とにした。

ほかにもご紹介したい冒険や驚きはたく
さんある。でもこれらは私の日本の旅での
忘れ得ぬ経験であると思う。上のように笑
えるものもあるが、たびたび起こる地震の
ように恐ろしいもの、悲しい出来事もある。
でも四年間の日本の旅は興奮に満ちており、
研究ももちろんだが自分達とは違う文化や性
格の異なる人達とどうおつきあひし知り
合っていくか学んできたことはより大切だ
と思う。私にとって一日一日が冒険であり
人間として成長する機会であった。それに
対し本当に感謝している。

（環境資源・研究グループ任期付き研
究員／訳 真田孝之）